70年代から現代までの音楽とダンスの変遷

大阪芸術大学 舞台芸術学科 教授 栗原めぐみ

ダンスジャンルにより該当しないものはあるが、音楽とダンスは切り離せないものである。ダンスは音楽の移り変わりと共に形を変えているが他方では、エンタテインメントやアートに留まらず、教育、フィジカルヘルスは勿論、メンタルヘルス分野においても研究が進み、その可能性を広げ続けている。

アメリカでは、ストリートギャングから生まれたHIPHOPが今ではその定義-RAP, Dance, DJ, Graffiti-に収まりきらないスケールとなり、自由な性質そのものがHIPHOPともいえる。現代では小学校から大学教育においてHHBEを活用する学校も少なくない。

ヒップホップ型教育 (HHBE)

●ヒップホップの要素を教育に取り入れることで、学習効果の向上を図る教育手法

●アメリカの若者（特に有色人種）に人気のあるヒップホップを介して、学習動機を高めたり、勉強へのきっかけを与えたりする目的で取り入れられている。また、現在では300以上の大学でヒップホップ関連のコースが開講されている。

・アリゾナ大学ではヒップホップ学を副専攻として選択可能。

・ミネソタ州のマクナリー・スミス音楽大学ではヒップホップ音楽の制作、言語、歴史を学べるコースを提供、修了者にはヒップホップ学位が与えられる。

キッズ教育を例に挙げると、アメリカの多くの学校では体育の授業を削減しているが、子どもたちにとって一日中座って勉強することは難しいので集中力を高めるため、Healthy HipHopを取り入れる学校もある。

Healthy HipHopとはキッズに楽しい学習環境を提供するプラットフォーム。Rap というと教育とはかけ離れたところにあったが、こちらのRapはキッズのための健全なヒップホップで、重めのビートに乗せた健全なリリックでマインドフルネスにも良いとされる。

●数の数え方をラップする「Learn To Count」

●野菜を食べることを推奨する「The Vegetable Song」

●コロナ禍での手洗いの大切さをライムする「Wash Your Hands」

※ライム:歌詞(リリック)で韻を踏むこと。言葉の終わりを同じ音で終わらせることでリズムを作り出す

・どのようにマインドフルネスに良いか

子供は何かを学ぶ時、歌を通した方が記憶に定着し

やすいとされる。マインドフルネスはリリックとの関係が大きい。例えば「Healthy」のサビでは

「今とっても健康、健康でいなくちゃ。健康でいたいんだ、ずっと健康でいられたらいい。自分のフィジカルヘルス、メンタルヘルス、ちゃんと大事にするんだ！」とエンパワメントする。

・ダンスを踊ることは、集中力や基礎体力がアップし、リズム感、表現力が身に付き、更に他の子供たちと一緒にダンスをすることで、他人を労わる心や思いやる心、社会性が身に付くと言われており、日本でも教育コンテンツとして注目されている。

日本では、それまでディスコのみで踊られていたソウルダンス、ロボットダンスが一般大衆の目に入ったのが映画サタデーナイトフィーバー(1977年)、ジャズダンスブームのきっかけの一つとなり、また世界中の人々が初めてブレイクダンスを目にしたであろう映画がフラッシュダンス(1983年)であり、その後バブルと共にディスコブームが訪れ、ダンス番組が増えて行き、そこからTRF、現在のLDH社長五十嵐広行(元EXILEリーダーヒロ)など多くのタレントダンサーが輩出された。

90年代に入るとストリートダンスを教えるダンススタジオも増え、2015年版スポーツ産業白書によるとストリートダンス人口は600万人を越えた。ここまで人口が増加した理由の一つとして、ダンスの変容が挙げられる。

ダンスの変容=音楽の変容

・音楽は時代の象徴でもあり、人々の思考や生活を反映しているが、そういう意味においてダンス部員198名への音楽とダンスに関するアンケートは興味深い結果となった。(ヒップホップ、ジャズヒップホップ、創作ダンスのジャンルの違うダンス部中学校、高校でのアンケートを実施)

作品制作での結果

10代から50代までの幅広い世代のダンサーに70年代テイストの音楽を使用し作品を踊ってもらったところ、その表現が世代によりハッキリと分かれた。(体力の差ではなく)それぞれの世代が今を生きている。同じ時代を生きていても青春期にアナログな時代を過ごしたバブル世代とZ世代では興味の的が大きく違う事はいたって自然であり、ダンス表現においても顕著であり、それが個性となってモザイクのような面白味を醸し出していた。